

令和2年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団体名	特定非営利活動法人鳥の劇場	
施設名	鳥の劇場	
助成対象活動名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	28,125	(千円)
公演事業	19,204	(千円)
人材養成事業	7,825	(千円)
普及啓発事業	1,096	(千円)

(1) 令和2年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場			
1※	〈不思議の国のアリスの〉『帽子屋さんのお茶の会』	2020/4.29・5.2~6・5.9・10	<p>〈不思議の国のアリスの〉『帽子屋さんのお茶の会』</p> <p>作：別役実 演出：中島諒人 出演：齊藤頼陽・中川玲奈・大川潤子等 舞台監督：岩崎健一郎 映像配信：M&M</p> <p>※コロナ感染拡大により無観客・無料ライブ配信を実施</p>	目標値	1,500
		鳥の劇場		実績値	6,955回 (ライブ配信視聴数)
2※	ニッポンの戯曲シリーズ1 「空気」に支配される日本社会で、安部公房『友達』を通じて人間集団について考える	2020/9.26・27	<p>『友達』</p> <p>作：安部公房 演出：中島諒人 出演：齊藤頼陽・中川玲奈・山本芳郎(劇団山の手事情社)等 舞台美術：Jean-Francois Guillon 舞台監督：岩崎健一郎 映像配信：M&M</p> <p>※コロナ感染拡大防止のため、座席を50%に減らし、無料ライブ配信を実施</p>	目標値	440
		鳥の劇場		実績値	207 396回 (ライブ配信視聴数)
3※	ニッポンの戯曲シリーズ2 『戦争で死ねなかったお父さんのために』消費社会の入り口で「若者」たちは、「戦争」をこう振り返った。	2021/2.20~28 (休演日：2.24)	<p>『戦争で死ねなかったお父さんのために』</p> <p>作：つかこうへい 演出：中島諒人 出演：齊藤頼陽・中川玲奈等 照明：大迫浩二 舞台監督：大野英寿 映像配信：服部かつひろ等</p> <p>※コロナ感染拡大防止のため、座席を減らし、無料ライブ配信を実施</p>	目標値	1,040
		鳥の劇場		実績値	396 1499回 (ライブ配信視聴数)

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和2年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1※	小鳥の学校	2020/6～2021/3	小学校4年生から中学校3年生までの演劇を使った人材育成事業。 【講義】 監修：中島諒人 受講生サポート：中川玲奈・後藤詩織・寛洋子 講師：Yoo Taehoon・大岡淳 【発表公演】 『人魚姫』 原作：寺山修司 構成・演出：中島諒人と小鳥の学校受講生	目標値	入場者 150 参加者 30
		鳥の劇場		実績値	入場者 242 参加者 19
2※	高校演劇もっと盛り上げ事業 つくる高校生	2020/8・2020/11～2021/3	高校生、もしくは中学を卒業してから18歳までを対象に行う人材育成事業。 【講座】 作品創りの基礎力向上を目指し、二つの集中講座を開催。 講師：中島諒人 【制作支援・発表公演】 鳥取県内の高校演劇部が舞台芸術の専門家の指導のもと作品を制作し、発表。 演目：『DOLL』 作：如月小春 受講生・出演：鳥取敬愛高等学校演劇部 作品監修：村上厚二 舞台監督：大野英寿	目標値	入場者 200 参加者 10
		鳥の劇場・鳥取市民会館・鳥取敬愛高校		実績値	入場者 102 参加者 50
3※	若手演劇人の作品向上と社会との関係作り支援事業	2020/6～7・2020/9	・若手劇団を招聘し、滞在制作、公演、研修事業を実施。 対象：theater apartment complex libido: 上演作品：「libido:AESOP」 ・「鳥の演劇祭13」内において、公募で集まった若手演劇人に対する研修事業を実施。 研修生：福永武史・宮下泰幸・菅沼岳・絵里子・下地萌音	目標値	入場者 150 参加者 15
		鳥の劇場		実績値	入場者 135 参加者 15
4※	おとなな劇場リーディング上演	2020/12～2021/3	65歳以上の公募で集まった一般の方たちによるリーディング上演。 演目：『怪談 牡丹灯笼』 原作：三遊亭円朝 脚本・演出：齊藤頼陽 出演：足立雅子・大西明美・金田由子等 ※コロナ感染拡大防止のため、上演は座席を減らした状態で実施	目標値	入場者 150 参加者 10
		鳥の劇場・鹿野町農業者トレーニングセンター		実績値	入場者 61 参加者 8
5※	大学連携	2020/9.17～20・2020/7.20	【インターンシップ】 「鳥の演劇祭13」期間中、鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コースの学生がインターン参加。 【講義】 鳥取短期大学の授業「現代鳥取学」に講師派遣。鳥の劇場の地域におけるアートマネジメントについての講義を実施。 派遣講師：松本智彦	目標値	インターンシップ 10から 20
		鳥の劇場・鳥取短期大学		実績値	インターンシップ 2 講義参加者 100

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和2年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	戯曲の講座 名作を通じて「今」と出会う	2020/6.26・ 2021/2.20・27	名作戯曲を取り上げ、演出家のナビゲートのもと、参加者との対話も交えながら、戯曲や作家の世界の読み解きを行う。 取り上げた戯曲：別役実『<不思議の国のアリスの>帽子屋さんのお茶の会』・安部公房『棒になった男』・つかこうへい『熱海殺人事件』 講師：中島諒人	目標値	40
		鳥の劇場・ ギャラリー鳥たちのいえ		実績値	38
2※	地域に演劇力お届け事業	2020/6～2021/3	【学習発表会の支援】 学習発表会、本番に向けての指導・助言の実施 講師：中島諒人・齊藤頼陽・中川玲奈等 【選択授業「演劇」】 学習発表会、下学年対象の上演に向けて、台本・作品の創作 講師：齊藤頼陽・高橋等・安田茉耶 【養護学校でのワークショップ】 講師：齊藤頼陽・安田茉耶	目標値	1,300
		各教育機関		実績値	参加者 210 観客 220
3	劇場で働く人たちを知る	2020/8.1	小学4年生から中学3年生までを対象とした、劇場での“お仕事”体験プログラム。俳優・音響・舞台監督[道具]・制作の4職種の体験が可能。 スタッフ：中川玲奈・高橋等・中垣直久等	目標値	20
		鳥の劇場		実績値	参加者 14 観客 40

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>本補助金事業の中で、公演事業3つ・普及啓発事業3つ・人材養成事業5つを実施した。当劇場のミッションは、地域の中に創作拠点を置くことで、舞台芸術の創作の質を高め、それを核にしながらかその熱に観客を巻き込み輪を広げること、幅広い世代に多様な切り口で芸術体験の機会を持ってもらうことである。また、非日常の演劇の場で、新しい出会い、世代間交流を生み出すことである。これらを多角的多層的に展開することで、沈滞した地域に刺激と活力を与えることで、地域の新しい発展に寄与することである。</p> <p>どのように年間プログラムを組み立てるか、2006年の活動開始以来、スタッフが生活者として地域で暮らし、地域の特性や状況を肌感覚で感じながら、工夫して練り上げてきたものである。公演事業も大事であるが、一方で参加型のもも大事である。小中学生の成長のために演劇の豊かさをどのように活かしてもらうか、高校で演劇をやっている人たちに、演劇の作り方を知ってもらうにはどうしたら良いか、若い人だけでなく、高齢者にも演劇の豊かさに触れてもらいたい。そうであるなら何をすれば良いか。また、我々が地域の中で活動し蓄積してきた経験やノウハウを若い世代の演劇人に伝えるにはどうしたら良いか。</p> <p>地方の中山間地にある劇場の意義を最大化するために、そして地域社会と演劇界に貢献するために、ということを考えながら立案し組み立てた事業である。</p> <p>新型コロナ感染拡大という未曾有の事態の中で、来場者数の減少などはあったものの、予定通りに事業を遂行することができた。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>鳥取の中に演劇ファンが確実に増えている。コロナによる来場者マインドの萎縮のようなことももちろんあったが、家族連れや若い世代、子供の入場も増加傾向で、いわゆるわかりやすい作品ばかりでなく、「友達」「戦争で死ねなかった、」のような強烈な作品にも観客がついてきてくれていることが、アンケートやアフタートークなどを通じて感じられる。</p> <p>社会的な意義については、学校現場でのニーズの高まりがエビデンスとなるのではないだろうか。学習発表会などでの演劇発表の指導に担当の先生が困って、こちらに指導の声がかかるというのが以前は多かったが、回を重ね、いろいろな学校で実施する中で、演劇の教育的側面を理解してくれる学校現場が増えてきている。</p> <p>2020年は県外からの誘客がほぼできなかったが、県内他地域からの観客は多く、地域経済に対しても貢献をすることができた。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

2020年度は公演事業として3つの日本の劇作家の作品を取り上げて、日本語の魅力を感じてもらいながら、現在の日本社会の課題について観客に投げかけることができた。また子供から年配の方までほぼ全ての世代を対象にした参加型プログラムを展開することもできた。誰でも参加しやすく、同時に奥が深く、参加者同士の関係も醸成する人材養成の事業は、参加者そして成果発表に来場する家族や関係者も含めて、演劇だけが作り出せる人間の可能性発展の場として非常に歓迎された。

また、普及啓発事業は、どれも短時間のプログラムではあるが、その分新しい観客・参加者との出会いともなり、大きな意義があった。

新型コロナ感染拡大により事業の変更をした部分もあったが、工夫しながらなるべく予定通りに事業を行った。どの事業も、事業単体としての中身の充実があり、それが多角的多層的に組み立てられることで、地域の中の演劇を中心においたアートセンターとして大きな役割を果たすことができた。

新型コロナ感染拡大による影響を除いて考えると、地域社会への貢献という意味で目標は概ね達成できた。無観客となった5月公演も、結果的に多くのそして全国からの視聴数となり、活動を広めるという意味で、全く予期していなかった成果となった。

地域社会への貢献とは別目的の若手演劇人支援事業は、首都圏を拠点とする劇団を対象としていたため、コロナ対策などが必要となったが、まさに稽古できない首都圏での状況に対して、鳥の劇場で作品作りを行い、野外で観客に届けるという形で事業の実施ができたことは、若手演劇人の成長という目標に対して、たいへん大きな意味があった。

多様な事業を年間通じて実施することを通じて、演劇を観る喜び、考える喜び、未知の体験に出会う喜び、人と出会う喜びなどを、演劇文化が基本的に皆無であった場所で展開できていることは、事業全体の目標を十分に達成したと評価できる。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

事業期間

創作の準備期間については、芸術創作上は余裕が必要で、コスト面で考えるとできるだけ短期間に済ませたい。また事業実施期間については、なるべく多くの利用者に機会を提供したいという意味では、なるべく事業期間を伸ばしたい。コスト面を考えると短期間が望ましい。

創作の準備期間については、かなり無駄なく効率的に創作の進行管理が行われている。いつも悩むのは、事業実施期間（公演数等）の設定である。地方の文化施設のミッションとして、鑑賞機会、体験機会を増やして、新規の利用者を増やしていくことを心がけているが、あまり利用者が少ないのも好ましくない。実際のところ、週末を中心にして公演等を実施している。しかし、ウィークデー昼間の公演なども一定の来場者があり、常に悩ましいところである。（近年は、ウィークデー昼間の公演を無料の学校招待公演とし地域の子供達に観劇機会を提供している）

本年はコロナ感染拡大により事業計画が変更になった部分が多々あった。

事業費

劇場メンバーが、年間通じて様々な事業についてかけもちをしながら効率的に動いていくことで、当劇場の事業は成り立っている。一つの事業についても、複数の役割をこなしながら進めていく。本補助金においては、要望額通りの金額とはならなかったことから、その分を俳優、スタッフにも事情を理解してもらい予算を縮減しながら進めた。もっと人に対して支払いをすべきであったという思いは残るが、かけた時間、成果に対して、事業費はおおむね適切であったと考える。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

演劇の事業をこれだけ多様に展開し、多くの人に鑑賞と体験の機会を提供している劇場は、この地域では当劇場が唯一である。地方においてはもともと演劇に興味を持っている人の数は非常に少ない。顕在化しているニーズはほぼないと言っても良い。その中で、どのような事業内容にし、それをどのように提案すれば人が来場してくれるか、どうすれば来場した人が満足し、次の来場、次のお客さんにつながるかということに、劇場スタッフが知恵を絞り続けてきた工夫の成果として各事業がある。

2020年度も合計11個の多様な事業を通じて、地域の文化拠点としての力を最大限に発揮した。鳥取県を代表する文化拠点としての認識は広まっており、演劇に関連する上演やワークショップなどの実施やレクチャーなどの依頼も多く舞い込むようになっている。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

地域の文化発展への貢献の指標として考えられるのは、
我々の手元で測れるものとして

定量的なもの

- ・公演鑑賞者数
- ・ワークショップなど体験の場への参加者数
- ・偏りのない幅広い世代の来場
- ・初めて劇場に来場した人の数

定性的なもの

- ・観客の作品や活動への理解度
- ・アフタートークへの興味、その実施の際の盛り上がり

が考えられる。

2020年度は、いずれも測定が困難な状況であった。しかし、安部公房やつかこうへいの作品への観客の熱意は高く、戯曲講座の参加者は増加している。

地域の文化芸術の発展ということで考えると、もう一側面として、

- ・鳥取県域でのアマチュアの演劇公演など演劇関連事業の活性化
- ・小中学校、高等学校、大学などにおける演劇事業の活性化

なども期待したいとことである。

残念ながら、アマチュア劇団の公演数が増えるというような状況は見えない（そもそも鳥取にはアマチュア劇団が少ない）。が、小中学校、特別支援学校での学習発表会等で演劇公演が行われ、そこに鳥の劇場がサポートを求められるケースは増えている。また高等学校では演劇部の活動において、鳥の劇場のサポートが全体の活性化に貢献している部分は一定程度確実にある。

毎年開催している「小鳥の学校」事業の発表公演は、大変人気で、演劇の人材養成的機能が地域に認識されてきている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

民間の NPO としての鳥の劇場の活動は、財団などにより運営されるものに比べて脆弱で持続性において不安な部分があるのは事実である。しかし、2006 年にゼロから始めた時から、地域の文化拠点として、地域の芸術文化、精神文化活動の拠点として地域を牽引し、全国・世界に発信していこうという決意のもと活動を継続している。

観劇の場として、国際演劇祭の場として、教育の場として、そして最近は修学旅行などの場として地域になくてはならない存在として、地域住民、鳥取県、鳥取市の行政からも大きな信頼を寄せられている。

2016 年には劇場の改修工事が、鳥取市、鳥取県の費用負担により実施され、現在は次のステップとして、作業場施設の新築の検討を始めた。これは鳥取市と地域住民を巻き込んだものである。全体として、15 年の活動継続の中で、鳥の劇場の活動が今後も持続されることは地域の願いとなっている。

ただ、地方での活動のため観客動員数、チケット等売り上げには限界があり、かつ、民間であるため公立文化施設のように毎年確保された予算があるわけでもない。特に施設の維持費や管理的な経費について安定的な資金源がないのは、非常に苦しいところである。

この財政的な課題をなんとか乗り越えて、安定した運営体制を作っていくこと、それを可能にする各種公的サポートを得ていくこと、民間の寄付なども拡大することなどが今後の課題である。